



©Ayane Shindo

第190回定期演奏会

2022年6月18日(土) 13:30開場 14:30開演

三井住友海上しらかわホール

指揮/マーク・マスト ヴァイオリン/中村太地*

ブラームス: ヴァイオリン協奏曲ニ長調*

シューベルト: 交響曲第9番ハ長調「グレート」

我が常任指揮者、マエストロ角田鋼亮と共に、重厚なプログラムでシーズンを幕開ける本日に続きまして、次回定期(6月18日)もオーケストラの躍動をたっぷり楽しんでいただける、素晴らしい名曲2題です。ドイツ・オーストリア音楽の王道をゆく二人の作曲家……シューベルトとブラームス。親しみやすくも豊かで深い、歌の美しさから彩りが広がってゆく傑作たちを、ぜひ全身に浴びていただきたいと存じます。

指揮台にお迎えするのは、ドイツを中心に欧米で広く活躍するマーク・マスト。セントラル愛知交響楽団では既に、第162回定期(2018年6月)でブルックナーの交響曲第4番《ロマンティック》ほかを披露しているのをご記憶のかたも多からうと思います。巨匠チェリビダッケの薫陶を受け、音楽芸術の深遠を見通す鋭いまなざしも継承したであろうマエストロ・マストが、セントラル愛知交響楽団からどのようなサウンドを引きだしてみせるか、いま再びの出逢いに注目ください。

◆ブラームス: ヴァイオリン協奏曲ニ長調

次回定期の前半でお聴きいただくのは、ブラームス(ヴァイオリン協奏曲 ニ長調)。演奏時間40分におよぶ堂々たるスケールの作品ですが、第1楽章(だけで20分あります!)のずっしりした手応えはもちろん、なんとも柔らかく美しい緩徐楽章の幸せ、そして終楽章の躍動と情熱……と、聴いたあとの爽快さと充実感、さすがの傑作。古今のヴァイオリン協奏曲でも屈指の人気を誇る作品です。

ヨハネス・ブラームス(1833~97)がこの協奏曲を書いたのは、生涯の盟友とも言うべき名ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒム(1831~1907)の存在あってのことでした。ブラームスは若い頃から、ちょっと兄貴分に当たるヨアヒムと意気投合、彼の紹介で先輩作曲家シューマンと出逢い……と、人生を大きく変えられた存在でもあります。

ヨアヒムとの出逢いからおよそ四半世紀後。ブラームスが充実を深めていた45歳のとき、彼ははいよいよ(既にヨーロッパを代表するヴァイオリニストとして名声高かった)ヨアヒムのために、生涯ただひとつの(ヴァイオリン協奏曲)を書きはじめます。草稿の段階から、ヨアヒムにあれこれ具体的な演奏上の問題点などチェックしてもらいつつ、譜面に修正を入れたり、はたまた名手ヨアヒムでさえ弾きづらいと述べたところも、敢えてそのまま直さずに残したり……と、もちろん全力投球の作曲でした。

ブラームスがこの協奏曲を書くにあたって、先人たちからどのような影響を受けたのか、あるいはヨアヒムとどんなやりとりがあったのか、などご興味あるかたには、西原稔『ブラームスの協奏曲とドイツ・ロマン派の音楽』[芸術現代社、2020年]という本が詳しいのでお勧めしておきたいと思います。

作品に踏み込んだお話よりも作曲や時代の背景を広く知りたい、というかたには、同じ著者の『作曲家◎人と作品シリーズ ブラームス』[音楽之友社、2006年]が手軽ながら充実した一冊としてお勧めですが、こちらの本で、ブラームスは(近代の総括者)である、という視点が提示されているのは大事なところ。

ブラームスは同時代の潮流もよく知っていた一方で、古典の研究にたいへん熱心だった作曲家です。それこそルネサンスから19世紀まで膨大な音楽の厚みが、ブラームスの音楽にも深く刻まれているあたり、詳しく知るほどに「あ！」と発見もあるのではないかと思います。ヴァイオリン協奏曲から、どんな発見があるでしょうか？

次回定期でこの曲のソロを弾くのは、中村太地(同姓同名の棋士も活躍されていますが、こちらは1990年北九州市生まれの俊オヴァイオリニスト)。CD『ブラームス: ヴァイオリン・ソナタ集(全曲)』[Victor、2019年]をリリースするなど、ブラームスという作曲家にはこのほかに思い入れもあるかたです。

今回の協奏曲は、ソリストの技巧を誇示するばかりではなく、オーケストラとの緊密な呼吸と共に、両者がシンフォニックな音楽をつくりあげてゆくところが(も!)大きな感銘を生む作品ですから、中村さんとセントラル愛知交響楽団が(共に手を取りながら深く掘り下げてゆく音楽)を、ぜひ実感していただきたいと思います。

◆シューベルト: 交響曲第9番ハ長調《グレート》

ブラームスに続きまして、次回定期の後半ではシューベルトの(交響曲 第9番 ハ長調)をお聴きいただきます。愛称は《ザ・グレート》。と言うといかめしいイメージがあるかも知れませんが、全然そんなことはなくて、むしろ楽しい旅をするように歌と響きの美しさを満喫できる傑作です。

では、どうして《グレート》なんて愛称がついたのか……といいますが、割に話は単純で、先に書かれた(交響曲 第6番 ハ長調)という作品があって、同じ調号がついた交響曲同士でややこしいので、規模の大きいこちらを《大ハ長調》と呼んでいた、という由来。

ややこしいといえば、この曲の番号もややこしいところですが(はじめ「第7番」とされていたのですが、後世の研究で整理されていくうちに「第9番」になったり「第8番」になったり……)、まあ音楽を聴くには全然関係ない話ですから、お気になさらず。

呼び名や番号はともかく、なにしろ素晴らしく美しい傑作です。初めてお聴きになるかたは、ただ身を任せて聴いていただくと、ヨーロッパの緑ひろがる壮大な景色のなかに、観光列車にのんびり揺られながら、車窓を眺めているような気持ちになるかも知れません(シューベルトの時代なら馬車でしょけれど)。——交響曲の冒頭、伸びやかと言いますか、大らかと言いますか、ゆったり広がってゆくホルンのメロディが(伴奏もなく)聴き手の耳を優しくとらえます。のどかな雰囲気ですと惹き込まれたかと思うと、柔らかく入ってくる弦楽器群、そして木管群……と、静かで幸せなこの序奏はやがて、堂々たる響きを身にまとい、やがて生き生きと力強く進む主部へ。

ここから始まる《グレート》の旅路は、耳に馴染みやすいメロディが登場しながら、その彩りの微妙な変化もナチュラルに流れてゆく、車窓の果てなく美しい景色です。——ベートーヴェンの交響曲のように、主題を巧みに操りながら巧みにかがっちり構築してゆくスタイルとは違って(シューベルトは、そういうやりかたがあまり得意ではありませんでした)、転調を繰り返したり、楽器の組み合わせかたを変えていったりと、巧みなやり方を駆使しながら、様々な素材を彩り豊かに広げてゆき、聴き手を大きな流れへ取りこんでゆきます。

ですから、ベートーヴェンを聴くような集中力で聴くと「長い」と思われるかも知れません。しかし、ぐっと前のめりになる気持ちのスイッチを切って、シューベルト独特の(視野のとても広い、大きな流れ)に身を任せていただきたいのです。すると、この交響曲に、どれほど豊かな、遙か彼方まで視野の広がるような光景が広がっているか……全4楽章の素敵な旅路を満喫していただけるのではないかと思います。

詳しく予習したいというかたには、全音楽譜出版社から刊行されている総譜[2021年刊]に掲載されている柴辻純子先生の解説や、ハンス・ヨアヒム・ヒンリヒセン/堀朋平訳『フランツ・シューベルト あるリアリストの音楽的肖像』[アルテスパブリッシング、2017年]という本が鮮やかな知見に満ちた面白い一冊としてお勧めです。作曲家について広く知りたいかたは、村田千尋『作曲家◎人と作品 シューベルト』[音楽之友社、2004年]をぜひ。

そんな音風景の広く豊かな作品ですから、聴くのは愉しくても、演奏は決して易しくありません。その自在な構造成感に手綱をとられてしまうと、長大な音世界に弛緩が生まれてしまい、ともすれば凡庸に陥ってしまうというのが怖いところ。しかし、昨シーズンでも音楽の旅路にさまざまな豊穡を見出してきたセントラル愛知交響楽団ですから、シューベルトの旅路にも素敵な記憶を残してくれるはず。次回も、このホールで旅をご一緒いたしましょう!

やまの たけひろ 山野雄大

Profile

ライター [音楽・舞踊評論]。『レコード芸術』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ・テレビ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CDライナーノートや企画構成、オーケストラやバレエ公演の解説など多数。

